



信州大学 経済学部同窓会報

第 6 号

発行 者 信州大学経済学部同窓会
同窓会事務局 〒390-8621
長野県松本市旭3-1-1
信州大学経済学部内
TEL・FAX 0263-37-2309

平成20年 7月25日発行

E-mail : k-doso@shinshu-u.ac.jp
URL : http://www.econ.shinshu-u.ac.jp/index.html

第八号の紙面より

- 会長あいさつ 矢口晋司
- 経済学部創立30周年記念特集
林三代治
伊東一雄
- 連載 ゼミ「今」
— 後輩達のゼミ紹介 —
岩崎ゼミ
渡邊ゼミ

- 会員のためより
田中裕一 (1969年入学)
田中健二 (1977年入学)
金井透貴 (1983年入学)
西詰宗弘 (1990年入学)
中野誠樹 (1995年入学)
- 編集後記

会長あいさつ

三十周年記念によせて

会長 矢口 晋司
(1978年入学)

信州大学経済学部同窓会員の皆様におかれましては、各分野で広く活躍のこととお喜び申し上げます。

平素より、母校の発展ならびに同窓会活動に対し何かと関心を頂きありがとうございます。

さて本年六月、信州大学経済学部は創立三十周年を迎えました。

新しい学部の一期生として講義に出席していた若かりし日の自分を思い起こしつつ、月日の流れの速さを感じております。また、経済学部が創立以来残してきたその足跡は、地域社会にしっかりと根付き、地域とともに歩む経済学部との地位を不動のものにされたと強く感じております。現在、学部において記念式典、記念誌刊行、地域政策研究センター(仮称)設立記念募金など、記念行事の具体案の検討が進められております。前回の会報にも書かせて頂きましたが、この記念行事に対しまして同窓会として何らかの協力体制をとっていききたいと強く考えております。具体案が明らかとなった段階で、同窓会としてどう参画していくかを理事会にて協議、決定の上、協力していききたいと考えておりますので何卒よろしくお願い申

上げます。

なお、三十周年記念式典の開催日は、平成二十年十月十二日(日)となっております。平成二十年度の同窓会総会はこの日に同時開催することを理事会にて決定しております。多くの同窓会員の皆様方の参加により、盛大な同窓会総会ならびに記念式典として頂くことを再度お願い申し上げます。

さてここで、紙面をお借りして会員の皆様にご報告させて頂きたいことが二つございます。まず一つ目は、去る平成十九年十一月三日に開催した理事会において了承頂いた、経済学部同窓会東京支部設立検討委員会についてです。この度、経済学部の先生方のご意見を参考に、年次やゼミを考慮する中で選出させて頂いた委員会メンバーにより、同窓会東京支部設立に向けての検討委員会を立ち上げさせて頂き、第一回目の検討委員会を去る四月十二日に東京都内で開催し、東京支部設立の必要性等についての協議を行ないました。

その中では、情報人も東京に集まるという事実、出身ゼミ単位以外での接点を持つことの重要性は認識しつつ、ネットワークの維持、管理の難しさといった点など課題の多さに対する意見が出されました。そして、東京支部設立の必要性は認めるものの、その活動内容、活動方法等についての具体

的なイメージ作りが不十分であり、今後ゼミ単位での活動状況等を把握する中で、各方面からの情報収集に努め、検討を重ねることを確認し、散会となりました。今後も随時検討委員会を開催し、支部組織の在り方を検討してまいりますので、会員の皆様方の忌憚無きご意見をお寄せ頂きたいと思っております。次に二つ目ですが、終身会費納入に関する件であります。去る平成十九年十二月二十二日付け文書にて、会員の皆様方に終身会費一百万円の納入をご依頼申し上げたところ、趣旨をご理解頂き、五月末日現在で四百二十二名の皆様方よりお振込みを頂きました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。しかしながら、私どもの説明不足が原因で、まだ多くの会員の皆様方に終身会費徴収の趣旨をご理解頂くことができず、お振込み手続きを完了して頂けない状況となっております。再度ここで、会員の皆様方に年間約百三十二万円の支出超過状況にある財政状況ならびに学部に対する今後の協力体制確立への準備という趣旨をご理解頂き、同封の振込用紙にてお手続きされますよう、お願い申し上げます。

経済学部創立三十周年を迎えた記念すべきこの時を契機に、同窓会員の皆様方より一層のご活躍をご祈念申し上げますと共に、同窓会もより一層発展、成長して行くことを祈念し会長あいさつとさせていただきます。

経済学部創立三十周年記念特集

三十周年

記念によせて

元同窓会長 現幹事

林 二代治
(1966年入学)

信州大学経済学部が本年三十年を迎えられるとのこと、まことに喜ばしい限りです。私は信州大学が変化を遂げ始めた昭和四十一年に経済学部の前身の人文学部経済学科の一期生として入学いたしました。またその年は長野県下に点在するたこ足大学と言われていた当大学が、旭町キャンパスに教養部を創設し、全学部の新入生が始めてまとまった講義を受けるといふ歴史的な年でもありました。二年目からは旧制松本高校の名残が残る趣のある県町キャンパスに移り、静かな環境の中で勉強をさせて頂きました。特に階段教室は講堂、ヒマラヤ杉とともに印象深いものがあります。先輩方は文学部部の学生でありましたが、ゼミは一緒でしたので自分と比較しよく勉強されているなど感心も致しました。乗鞍ヒュッテでの合宿での思い出、著名な先生方による集中講義、学園紛争等当時が懐かしく思い出されます。

さて人文学部経済学科には同窓会がありませんでしたが、経済学部同窓会の皆様から加入を勧められ加入させて頂いた時に地元におりました関係から同窓会会長という大役を頂きました。頂きながら活動が十分に出来ず申し訳なく存じておりますが、現役員の皆様が多忙の中、立派なご活動をなさり敬服致しております。当時卒業式後のパーティーに出席し祝辞を話す機会がございました。社会人として特に企業に就職される方がほとんどと思いますが、自分にしかない個性を生かして、存在感をみせていって欲しいと先輩として話した記憶があります。今でも現役の若い方は自分で考え、主体的に行動されることを期待しております。

生き抜いていくためには生産性のアップ、他社との差別化等は必然ですが、親企業からの止まることのないコストダウンの要求等厳しい状況は際限がありません。親も子も持ちつ持たれつの関係があってもいいのではないかと感じております。世の中がますます市場化し、マネーゲームによる自分で自分の首を締める如くあらゆる格差が拡大し、また温暖化が進むなど大変な危惧を感じているこの頃です。今こそ人間の叡智がためされる必要な時ではないでしょうか。最後に経済学部が三十周年というおめでたい節目を迎え、世の中に貢献できる経済学部としてますますご発展されることをご祈念申し上げます。

松本青春記

質素と健全の

3M生活

元同窓会長 現監事

伊東 一雄
(1978年入学)

僕が経済学部（正確には入学式の時点では人文学部経済学科）に入学したのはちょうど三十年前。その年は翌年から共通一次試験の導入が決定していたため、旧一期校・二期校方式で行われた最後の国立大入試に通って信州大学に入学した。農家の長男の僕は、経済的な

事情から教養部「こまくさ寮」に入った。一年間の寮生活で他の学部の友達が出来た。寮の二人部屋は同居人は宮崎県出身の農学部K君で、同じ棟には人文理学、工学、繊維、教育学部など各学部のユニークな仲間がいた。二人部屋制の寮生活のおかげで、さびしい思いもせず学生生活を送ることができた。こまくさ寮では、翌年の入寮生を決定する入寮選考委員会のメンバーとなった。当時、入寮希望者が定員を上回る場合は、親の所得状況をもとに、より経済的に恵まれていない（実家の所得の低い）学生から優先的に入寮を決定していた。結果的に寮生は僕のような実家が農業や自営業商店をやっている学生がほとんどで、親が会社員や公務員の者はまじりなかつた。この選考委員として入寮希望者の所得状況を調査する中で、課税所得の職業別捕捉率格差「給与所得者十割・自営業五割・農業三割（とう・こう・さん）」の実態を大学一年にして学んだ。財政学を先取りして学習した。大学二年になってこまくさ寮を出て、あこがれの下宿生活を始めた。

岡田松岡にあるトイレ、風呂、台所および洗濯機が共同利用の学生下宿の六畳一室を間借りした。家賃は一万一千円だったと思う。全部で五部屋あったこの下宿は、元開業医の診療所を下宿用に改造したもので、僕の部屋は、受付待合室だったらしく、隣室との仕切り壁には受付窓口の出っ張り（横板）が残っていた。治療処置室でなくてよかったと思う。たしか院長室兼応接室だった部屋は広かった。少し家賃が割高だった。親の仕送りの負担を考えて孝行息子の僕は、超質素な学生生活を送った。ただこれには一応訳があった。親の経済的な事情もあるが、簡単にいうと貧乏学生にくせして信大体育会陸上競技部に所属したため学生必修のアルバイトをあまりできなかったことが大きい。今の学生には信じられないと思うが、大学の四年間、電話勿論携帯ではなく固定電話、テレビ、それに松本の冬に必要なストーブのない生活を通した。冬はコタツで耐えた。当然に自動車はなく、運転免許も卒業間際の三月に元町の自動車学校で免許をとった。交通手段は中古で買った自転車を中心だったが、長距離移動には、奨学金で買った中古十五万円のバイク（ホンダCB125T）を駆使した。テレビは、同じ下宿にいた経済学部D君に見せてもらった。電話連絡は、下宿の大家さんの電話にお世話になったが、当時不思議なことに電話連絡で困った記憶がない。携帯全盛期の今では考えられない。三度の食事も当然自炊をやって食費を節約。実家から米はもちろん野菜、漬物、りんごに味噌まで送ってもらったので非常に助かった。「三六五日毎日

のおかず「みたいな料理の本を買って簡単な料理にも挑戦した。自炊経験のおかげで結婚後、焼きそばやチャーハンなど炒め物中心だが調理できるので、この点だけは女房に重宝されている。ただ、極力お金をかけないように、安い食材で質素な野菜中心の料理が多かったため、下宿によく遊びに来た陸上部の友人K君（工学部二浪、東京の電気店のグルメの一人息子）に「伊東は粗食だなあ」とよく言われた。当然外食は、ほとんどなし。実際、定食屋や喫茶店で食事することはごくまれで、焼肉、ステーキ、寿司といった値の張るものは高嶺の花。ただ一年の時に大手・上土にあった某レストランで開店当時の価格（三百円ぐらい？）でステーキを提供する感謝セールがあり陸上部の仲間と押しかけ生まれて初めてステーキを食べた（学生時代で結局ステーキはこのときだけ）。まさしく質素な食生活であったが、ごくまれにだが贅沢をすることもあった。

一年の時、なぜかこまくさ寮の仲間と生まれて初めてすし屋（城東の「力寿司」へ行った。この時食べた「かに味噌」軍艦巻きには感動した。陸上競技大会（試合）前などには、萩町交差点近くの食堂「源太」でレバーニラ定食を食べた。特にレバーニラのたれが美味だった。レバーは自炊でも挑戦したが、あの味だけはマネできなかった（残念ながら「源太」にもうレバーニラ定食はないが、名物「山賊焼定食」は今もやっている）。僕の大学生活は、まず大学（松本旭町キャンパス）へ行き授業に出て、当時美須々々（水汲）にあつた県営陸上競技場（今の長野県民文化会館あたり）で真面目にトレーニングして、練習後、当時美須々の交差点（追分）にあつた松電ストア（現アツプルランド）で食料の買い物をし、下宿に帰るといふことを毎日繰り返していた。とにかく全日本大学駅伝（伊勢駅伝）、北信越インカレ、マラソンなどを目標にひたすら走っていた。教養部時代陸上部の友人K君（工学部現役）に「伊東は授業料を払っているから全部の授業に出席するのかわ？」と言われたくらい各授業に真面目に出た。おそらく陸上部の試合遠征の時以外は全部授業に出た。学部でも授業は欠かさなかった。親から仕送りをもらい、日本育英会から特別奨学金を貸与してもらい、さらに大学から授業料を減免してもらって、まさか授業をサボるなんてとてできなかった（そうでもないか）。三十年前かくも慎ましく質素かつ健全な学生生活をしながら経済学部同窓会長にまで登りつめた長野県職員の一端だけでも知っていたら幸いである。（追記 私事ですが）五月十八日、長野県千曲市戸倉体育館で行われたNHKのど自慢（生放送）に不肖私、長女（信大経済学部三年）と出場しました。ゲスト小林幸子の歌「もしかしてPart2」を

デュエットして結果は鐘二つ。恥ずかしながらご報告申し上げます。また長女が昨年十一月四日松本市県本文化会館で収録されたNHKのど自慢（十二月十六日録画放送）に出演し渡辺真知子の「かもめが翔んだ日」を熱唱し合格しました。謹んでご報告申し上げます（こんなことはかりでいいのだろうか）。

連載

ゼミ「今」

—後輩達のゼミ紹介—

岩崎ゼミ

須田勇一郎
平本 光一
島村 枝里

岩崎ゼミは、総勢三十名の大所帯ゼミです。主に経済・政治の現状分析を行っています。現状分析とは、原理論・段階論・現状分析の三段階に分けられる経済学の研究方法の一つです。



原理論では論理的に構成された純粋な形での資本主義経済の法則を解明し、段階論では資本主義経済の歴史的な発展段階を把握します。私たちの学んでいる現状分析では原理論や段階論を基に、現実の資本主義経済を分析します。ゼミではグループワークと基礎論勉強会の二形式で学習を進めています。まず、グループワークでは、分析対象とする地域（アメリカ、日本、EU、アジア）毎に数人のグループをつくり、書籍・新聞・雑誌・ネット

情報などをとくに、現在その地域で起きている主要な経済・政治問題について、調査、分析、発表を行い全体で議論します。次に基礎論勉強会については、ですが、基礎論勉強会では、日本や世界経済・政治に関する文献を要約、輪読、討論しています。二〇〇七年度は、小峰隆夫氏の『日本経済の構造変動』と田多英範氏の『現代日本社会保障論』を用いて勉強会を行っています。グループワークと基礎論勉強会を通して、世の中に溢れている事実や情報を整理する力、自分なりのものの見方、考え方を養っています。また、夏休みにはゼミ合宿を行っています。「実際に見るということは現状分析の勦を養うには重要」ということで昨年、今年度共に工場見学を行いました。昨年は「日産 追浜工場」今年度は「アサヒビール 名古屋工場」を見学しました。合宿の目的は、単なる社会見学で終わらないよう、事前にゼミ生で業種ごとにグループ分けを行い、プレゼンテーションとディスカッションを行います。事前にしつかりとした情報収集、分析を行うことで有益な合宿にもなり、また「経済・政治の現状分析」というゼミの目的を自分たち自身で経験することにもつながったと思います。以上のように岩崎ゼミでは、時には机にかじりつき、時には大学を出て視野を広げる勉強をしています。

渡邊ゼミ

堺澤 航

二〇〇八年度の渡邊ゼミのゼミ長の堺澤航です。渡邊ゼミに入ってから渡邊先生のもとで指導を受け早くも一年が過ぎ、三年生となった今年度はゼミ長として一年を迎えることになりました。今回は同窓会報ということで、信州大学、また渡邊ゼミのOBの皆様にもむけてゼミの状況をお伝えするわけですが、ゼミでは毎週どのようなことを行っているのか、一年間でどういったことを行っているのか、といったことを去年のこともふまえて渡邊ゼミの近況をお伝えしたいと思います。

今年度のゼミも新入生を迎え、十三名が新しく入り、人数はやや多目ではありますが、渡邊先



生のもと、合計二十三人で労働法・社会保障法を勉強しています。毎週のゼミでは、基本的には教科書を用いた労働法・社会保障法の研究、判例を用いた学習を行っています。各自テキストをまとめたり、判例百選から担当になった事件についてレポートし、学習を深めています。今年度は社会保障法で、五月には朝日訴訟について地裁から最高裁までの比較を行ったりしました。これらの学習を重ねて、就活等に向けた月一回程度のディベートも行っていきます。ディベートはそれぞれの議題に三人程度のチームを作り賛成派と反対派に分かれて討論をしています。今年度の新入生に向けたゼミ紹介の時には、「後期高齢者医療制度については是非」や「最低賃金引き上げを認めるべきか否か」などをタイトルにディベートをして、熱の入った討論をすることができました。今年度のゼミではディベートの回数を増やし、よりディスカッションの能力を高め、それぞれの実力を高めていきたいと考えています。

も乗鞍での合宿を予定しており、去年以上に盛り上げられたらと考えています。それから八月のボランティアですが大町での合宿を行いました。私は養護老人ホーム「鹿島荘」認知症対応型グループホーム「ひだまりの家」でのボランティア実習を行いました。実際に現場はどういった状況であるのか、どういった環境にあるのかを実習を通して体験することができ、勉強しているだけでは分らないことも味わえました。施設のスタッフの方々と交流することができ、現場の空気を直に感じられたように思います。ボランティア実習

会員のたより

少年老いやすく

学なりがたし

幹事 田中 裕一

(1969年入学)

朱子の「偶成」という漢詩の中の言葉といわれている。初めて聞いたのは、活字で読んだのかも知れない、おそらく高校生のころだったと思う。そのときから現在に至るまで、言葉の意味はすっかり理解したと思いついてきた。私は現在、故郷である茅野市に在住している。昨年の十一月より、体重の減量のため通勤の経路である自宅から茅野駅まで

は二年間行つたため、さまざまな事業所に行くことができ、今年も貴重な体験ができるのではないかと楽しみにしています。こういった毎週のゼミ、合宿などの行事を通して、渡邊ゼミは活動しています。渡邊先生は私達と一緒に卒業することになります。渡邊ゼミを盛り上げていけたらと考えています。今年度のゼミもまだ始まったばかりですが、渡邊先生のもとで貴重な指導を受け、実力をつけていきたいと思います。そしてOBの先輩方に負けたくないよう、渡邊ゼミを盛り上げていけたらと考えています。

いたが、忍び寄り老化を強く意識するようになってしまった。この様な時に、たまたま本屋でこの言葉を目にした。その時には、どうということもなかったが、日がたつにつれ心に残り、重たくわだかまり周りの景色が色あせていくのを感じた。思い起こせば、大学に入学したのは、今から三十九年前の一九六九年。高校卒業後、一浪を経ての入学であった。七十年安保を翌年に控え、学生運動が真つ盛りりの時で、六十八年は東京大学の入試が全面的に中止となった年でもあり、その影響は大きく第一志望校には見事に落ち、背水の陣での入学であった。もし、合格できなかったら、就職せざるを得ない家庭の事情もあったため、信州大学への合格は助かったとの気持ちと、第一志望大学に合格できなかった挫折感を併せ持つ複雑な気持ちであったことを今でもしっかりと覚えている。一年生の時は、都市部の学生運動が下火になり、遅ればせながら地方の方が活発になる時期にあたり、ごたふんに漏れず、大学封鎖が行われた。この間、こまくさ察に入っており、さまざまな地域より集まった同世代の若人と、徹夜で議論し、本を読み、酒を飲み、時々デモに参加した。いわゆる当時としては、一般的な大学生であったと思う。明るく楽しかったし、また暗かった。希望に満ちていたし、

不安だらけでもあった。学生運動の掲げる弁証法的唯物論に基づく正義の主張に同感すること多かつたが、もとより金銭的に苦しい零細自営業者の家庭に育つたこと、さらにたいした才能もなく自分に自信がなかつたこと、階層上昇意欲が強いエゴイストであることにより、二年生の時より、会計学の資格試験(公認会計士)の勉強を独学で行うようになっていた。

大学の授業にもほとんど出ずに、一日十二時間程度必死に勉強したが、当時の松本には専門学校もなく、勉強の仕方がまずかつたせいなのか、また能力がなかつたせいなのか、目的を達成することは出来なかつた。

やがて、大学を卒業し、地元企業に就職し、早三十五年、苦しいこと、恥ずかしい事等、様々あったが、月並みだが、よい仕事、同僚、先輩に恵まれ、無事に現在も同一企業グループに奉職している。

三十五年間、転職もなく一つの企業グループに継続的に勤務できたことは、本当によい時代に就職し仕事が出来たことを心より感謝している。

「少年老いやすく学なりがた

し」は、聖人朱子をも痛感した人生の焦りの気持ちだと勝手に推測している。

年齢六十にならんとする現在。一昔前なら老人である。せいぜい生きても、あと二十年から三十年。若いとき出来たことが、年々出来なくなり。現状維持を主張する精神と日々減退する肉体の落差を感じるとき一抹の侘しさの感慨にとらわれるのは私だけであろうか。

老計という言葉がある。人生の最終章に当たり、なんとしても自分の人生を充実したものにしなければならぬ。年とともに様々ながわわり、世の中を俯瞰的に見通すことも昔に比べれば出来るようになった気がする。

それにしても、現在の日本の社会を見るにつけ、急速に時代が悪い方向に向かいつつあるように思える。

財政問題、地方経済の衰退、政治の機能不全、医療問題等、現象を上げれば切りがない。子孫に残す社会に対する責任を痛感して、社会貢献も今後の大きな課題であると思っている。

今、この文章を書きながら、改めて、将来にフォーカスし、力まず、自分の等身大で自分が納得することを判断基準に、貪欲に、しかし余裕を持って、苦勞を求め、しかも楽しみを大事にし、一生発展途上人として今後の人生をアグレッシブに生きたいと決意するしだいである。

面白きこともなき世を面白く

住みなすものは心なりけり

(東行 辞世の句)

同窓会会員の皆さん 木曾の名酒「七笑」 で再会しましょう

幹事 田中 健二
(1977年入学)

只今、六月一日、日曜日の午後十一時を回ったところです。食卓の横のホワイトボードに貼った原稿依頼を横目に、日々の雑事に紛れ、締切を過ぎて、やっと筆を執った次第です。思い返せば、学生時代の試験、入学試験、卒論等々、締切が迫らないと机に向かわない繰り返しでした。という訳で事務局の方原稿が遅れ申し訳ありません。最初にお詫び申し上げます。

やっと、本論ですが、夕食の後、ビール片手に信大のホームページで、まずは、大学の最近の様子を拝見。卒業後の信州との関わりは、たまたに、友人に会うために松本に行ったり、結婚して、子どもが小さな頃は、夏の名古屋の不快な暑さを逃れるために、霧が峰方面などに小旅行をするくらいでした。まして、大学には卒業後、一度だけ、長男が小学校の低学年のときに、お父さんの行っていた大学を見たいと言った時に、行ったきりで、それ以外、足を踏み入れたことがありませんでした。もちろん、新聞などで、信大の入試

改革や社会人講師の導入が話題になったことは知っておりましたが、その後、信大を訪れたのは、平成十六年の同窓会に、たまたま、都合があつて、出席したくらいのことでしたので、大学の状況については、浦島太郎の気分でした。ホームページで見ると思い、法人化を経たこともあると思いますが、ひとことと言つとお洒落な？雰囲気、かつこよくなつたと言つのが、率直な感想です(愛知県でも、ここ数年、私の隣のチームが県立の三大学の独立法人化を進め、昨年から独法化しましたので、法人化の功罪は少し理解しているつもりですが……)。

私が入学した昭和五十二年から、三十年余が過ぎようとしていたので、当たり前と言え、当たり前のことですが、その頃の信大は、旧制松本高校から続く「思誠寮」に象徴されていたように、古きよき時代のパンカラの気風がかすかな香りを残す大学だつたと思ひます。入学式の後、何回も続く新入生の歓迎コンパでも、信州木曾の名酒「七笑」がどんぶり茶碗で回ってきて、気が付くと、下宿の天井がぐるぐる回っている状態。どうやって、下宿へ帰ったのか誰に送ってもらったのかわからないうちに、半年くらいは、そんなことの繰り返しでした。今、思うと、自分の酒量、酒の飲み方を覚えたのも学生時代だつたなと思ひます。

当然のごとく殆ど何も思い出せませんが、それは、その後の県庁での仕事の中、日々の生活の中で活かされていることにして、松本で過ごした四年間の記憶を呼び起こし、思いつくままにあげてみたいと思ひます。

まず、普段ろくに勉強した記憶はないのですが、それでも、試験の時期には、殊勝にも、図書館で本を開いておりまして、そこで、何を読んでいたのか、全然思い出せませんが、図書館の窓越しに見た雪をいただいた北アルプスの山々が夕日に照らされて輝く神々しい風景。大学のシンボルである美しいピラミッド型の常念岳。また、冬の凜とした澄んだ空気の中、梓川の河畔から見た冬の北アルプスの峰峰。程近い穂高の「碌山美術館」の彫刻「女」。それに、何にもまして、下宿で、居酒屋でいつ終わるともわからない、果てのない議論。三十年の月日がそれらすべてを懐かしく思い起こさせます。

楽しく松本での大学生活を過ごすなか、四年生になり、就職活動では、生まれ故郷の名古屋に帰ろうと思ひ、民間志向で某銀行に内定をいただいておりますが、その後、愛知県庁からの合格通知を受け取り、大いに迷つた末、現在の糧を得る県庁に入庁したのが昭和五十六年です。

入庁当初の半年ほどは、行政の仕事に抱いていたイメージとの相違から、初心のとおり、銀行へ行くべきだつたのかとの迷

いも正直ありました。その後、後述するように県庁の中で、仕事、上司、同僚などに恵まれる中、一昨年には、勤続二十五年の永年勤続表彰をいただき、就職の際、大いに迷ったことも忘れておりましたところ、過日、高校時代の同窓会があり、当時内定していた銀行に就職した友人が、一時、金融業界の春を謳歌したものの、その後、二回の大型合併を体験したことを踏まえ、私が県庁を選択したことを正解だったと言われたのは、内心、複雑な想いがよぎりました。紙幅が残り少なくなりましたので、県庁での仕事について、簡単に報告します。入庁以来、企画畑での仕事が多く、法律に基づいた仕事が多い行政の中で、法律に抛らない、さまざまな面白い仕事の企画、実施を経験してきました。平均で二、三年で異動してきたなかでも、国際交流と文化芸術の振興に比較的長く携わり、現在は、この四月に新設されたセクションで、二〇一〇年に開催する国際芸術祭の準備に追われております。

今回、会員のたよりの執筆の機会をいただき、書き始める前は「正直忙しいときに、ちょっと困ったな」と思っておりましたが、わずかな時間ではありましたが、三十年前の自分を振り返る時間となり、いろいろな思い出、少し切ない想いを呼び起こす貴重な機会となりました。

束の間、学生時代に戻り、年のせいでしょうか、懐かしさと同時に、その頃出会った皆さん

に会いたいという気持ちがあつております。今年の夏は、久しぶりに信州へ足を伸ばそうと思えます。同窓会の皆さん、現役の皆さん、また、松本キャンパスで、「七笑」を飲みましょう。

社会人になるための執行猶予

幹事 金井 秀貴
(1983年入学)

ラグビーに明け暮れた高校生活の残り半年を、「春には北アルプスに登るんだ」と自分に言い聞かせて受験勉強をしていた頃を、最近また思い出すようになりしました。思えば昭和五十八年に千葉県から信大に入学した私も、今では自分の娘が大学受験を考える歳になっています。

私は、入試改革一学期で他間に漏れずその典型で教養部留年や見事なまでの「可」ばかりの成績にもかかわらず、バブル期の恩恵で卒業後東京の中堅ゼネコンに就職できましたが、幼少期から両親とよく登山に行っていたことから、薪炭の薫る山小屋やペンション経営に興味を持っていたため、三年で退社し両親の援助もあり山梨県の南アルプスの登山口の温泉郷で十年間ペンションを営んでいました。飲むこと・食べること・そして自ら料理することも大好きであつた自分にとっては、本当天職だと思つて楽しんでいました。

思います。学生時代にお世話になつた野地先生にも、後輩のゼミ合宿で利用していただきました。信大医学部出身という山梨地元病院の院長先生にもひいきにしてくださいました。しかし、山村秘境の中で子供を育てているうちに、彼らが成長するにつれ教育について不安が募り、学生時代からの人脈のおかげで七年前に松本へ戻ってきました。

子供の教育と言つても、我家はどちらかと言つと放任主義だと思つていますが、ただいつも子供に言うことは、「良い人脈を創ること、それにはよい学校に進むべきだ」と話しています。私は、勉強こそほとんどしませんでした。信大を「母校」として、胸を張つて誰にでも言える思い出や人脈を創ることができました。最近仕事柄、人と学生時代の話になると、学校そのものに思い入れのある人が意外と少ないことに気が付きます。

私は、大学二年目から児童演劇サークルに所属しました。活動をしていくうちにそのサークル名のイメージとは程遠い、諸先輩方が現れ当時はすでに学園紛争そのものももちろんない時代でありました。当時の思想色をもつた先輩の影響を受けていると思われる先輩方が何人かいて演技のほか様々な激論を毎晩のように朝まで飲みながら交わす日々でした。当時で確か三十五年続いていた我サークルはすでに残念ながら廃部となつてしまいましたが、こちらも今では取り壊しになつた、四柱神社の隣

にあつた厚生文化会館でのクリスマス公演を目指して、松本の極寒の中、深夜二時過ぎまで練習し、そのあとは裏町で朝まで飲み歩くといつたもので、部員皆が四六時中一緒に家族のようでした。ついに部長まで務めさせられた私は、公演の打ち上げなどことあるごとに皆に胴上げをされながら、何度も松本城の堀に落とされたものです。そんな仲間達の多くは教育学部で今では県内で教員をしているものが多いのですが、県外出身者のなかには私と同じように松本に居を構えているものや、そのまま劇人の世界で活躍されているものもたくさんいます。「ゲド戦記」監督の宮崎吾朗君や、昨年からご家族で東京から松本に引っ越しに来られた、独り人形芝居で海外でも活動している楠光正先輩も我サークルの仲間です。また、会社の経営に携わっているものや日本各地の農家の人たちと接する機会のあるものからトップセールスマン・銀行員など様々な仲間が揃つています。「老後はまた安曇野に集まつて、それぞれの個性と人脈を生かして、何か事業でも興してまた仲間同士で楽しみながら生活してみたいね」と話す年代になつてしまいました。

今の私は、大都会や大企業の戦場のような生活から離れて久しく、平和呆けしているのかも知れませんが、学生時代は「おおいに遊べ」と言つてやります。当時とすれば親の腰かじりの身分で公言できませんでしたが、

大学は社会人になるまでの執行猶予期間だと思つていました。ほとんどが志を持って進学するものなのだろうが、その間の経験・人間関係などで人生は思いも寄らぬ方向へ向く場合もあります。興味を見つつけること、多種多様な人脈を見つつけること、なにより社会生活をするための常識を身につけること。一概には言えないかもしれませんが、上級の学校ほど優れたそのための環境と人材が集まつているのも確かだと思えます。少なくとも私にとつて、信大進学を選択したことは間違えではありませんでした。ただ残念なことに、娘は「信大には行かない」と申しています。酒の話しか出ない親の人間関係に、子供は不振を描いているのかもしれないが・・・そんな時はいつも「信大を笑つものは信大に泣くぞ」と発破を掛けています。

県外出身者の多い我が母校は、これからもその外からの新鮮な若い力と歴史文化の深い地元各界との融合の架け橋に益々貢献することを望むとともに、自分もその一員にと切に思つてこのころです。

近況報告します

幹事 西詰 宗弘
(1990年入学)

数年前、信州大学経済学部同窓会の幹事を仰せつかりました

が、幹事となつてからは同窓会の総会にも出席できておりませんことを申し訳なく思っております。

そして、今回、私のようなデキの悪い幹事にも寄稿の機会を頂きましたので、不慣れではございますが、私の近況についてお伝えしたいと思ひます。

私は現在、漁業に関する仕事をしています。漁業といっても直接沖に出て行くのではなくて（私の風貌や喋り方は漁師みたいと言われますが・・・）、漁業協同組合連合会という県内の各浜・港にある漁業協同組合の出資により設立された協同組織で、漁業に対し様々な形で携わっています。例えば漁船の燃料を供給する石油部門から、魚を獲る魚網等を供給する資材部門、獲れた魚を漁師から買って加工する加工部門、漁政活動・環境保全活動をはじめ監査や経営指導等幅広く行う指導部門などがあり、私は入会以降、何回かの異動があり様々な部署でいろいろな経験をさせて頂いております。ここで印象に残っている部署について少しご紹介させていただきます。

まずは、買付・加工を行う部門です。ここでは漁師が獲ってきた魚を各漁協がセリを開催して販売するところに参加して買付後加工をする部署でして、私はまず加工部門に配属されました。そこでは買付けられて運ばれてきたタコ（県の特産物です）を一日に一トン以上の量を大きな釜で塩茹でしていく作業を

行ったり、魚の佃煮を一日中作ったりしていました。また、PRイベントでは法被を着て、頭には鉢巻、漁師言葉を使ひて（なぜかビールが片手に！）、タコの天ぷらを一日中揚げていました。おかげで結婚してからはその技術は大変役に立っています。その後は買付部門に異動しました。買付の現場となる場所では、よくテレビで映っている漁港やセリの風景そのものでした。大漁旗を揚げた船団が帰ってきたり、その船を出迎える家族がいたり、新造船のお祝いで餅撒きをしていたりと初めて見るものばかりでした。また、初めてセリに参加したときももつと驚きました。魚の値段を提示する早さ（だいたい十五秒で今の相場や希望値段との兼ね合いを考えて提示します）や、威勢のよさ（ケンカするような勢いで話しています）について行けず、焦る必要以上に高い値段を付けてしまうこともよくありましたし、「海に放り込むぞ」と他の業者が怒鳴ってきたりしたこともありましたが、でもこのときが初めて自分が水産業界に身を置いていることが実感できた時でもありました。

次に海苔を専門に扱つた部門です。全国一、二を争う生産県であるため、特に海苔だけに部署が設けてあります。ここでは主に漁師から依頼を受けた網に海苔の種を付ける作業や海苔の格付けの他、全国の大手海苔商社が参加する共販会の開催を行っている部署で、現在在籍し

ており、ほぼ全ての業務に携わっています。

こちらの部署の繁忙期は海苔の最盛期となる冬を中心とした九月～五月頃までとなります。そしてその大半を漁協から持込まれる海苔の格付け作業に追われます。海苔検査員と呼ばれる職員が「優」、「特上」、「一等」など五十以上の等級を使い分けて格付けを行います。そして格付けされた海苔は、共販会において各商社の担当者が目利きをして値段を付けていくこととなります。そこでは検査員の目、つまり海苔の区別を正確にしているかという点が試される訳です。だから、格付け作業時（格付けは専門の検査員が行い、私は海苔数量の集計をします）に検査員は、黒い色が良いとされる海苔ですが、その葉質、獲つた時期でその風格、味等が異なりますので細心の注意を払いながら格付けしていくこととなります。この格付け作業を横でずつと見ているおかげで、最近海苔を見る目が少しは養われたように思ひます。

このように、季節を感じながら仕事をしていますと、昨今の異常気象と言われる気候の変化を漁師から聞いたり、自分の肌で感じるものが多くなつたりしてきたように思ひます。今まで取れないはずの時期にある魚が揚がったり、魚の産卵する時期が狂つたり、原因が分からないものが以前に比べて増えたように思ひます。また、魚の世界的需要が拡大している一方で、資源

枯渇や国内漁業者の高齢化に伴う減少が加速している状況にあり、漁業は大きな転換点を迎えるようになっているように思ひます。今後はさらに厳しくなっていくことが予想されますが、漁師の為だけでなく、日本の伝統の食文化を守っていく事が出来る仕事であると思ひ、今後も頑張っていきたいと思ひます。最後に、今回、このような機会を頂き、松本のことを思い出しながら書いていました。普段海ばかり見て塩気を含んだ風に当たっていますと、松本の爽やかな風や、北アルプスの山々を思い出します。二年程前に松本に行つた時には、多少変わったところもありましたが、やっぱり懐かしい風景がまだまだ多くありました。そう言えば、又坂ゼミの同窓会をそろそろしないと駄目ですね。確か前回の又坂ゼミ同窓会にて幹事を拝命してしました（はず？）ので開催についてそろそろ考えてみたいと思ひます。

人材育成について

幹事 中野 誠樹
(1995年入学)

以上、なんだかとりとめもない話になってしまいましたが、私の近況報告とさせて頂きます。

昨年の夏の終わり、松本でサイトウキネンフェスティバルを初めて鑑賞しました。在学中、夏休みの半ばになると音楽一色

になる松本にいながら、結局一度も機会がなく、卒業して九年目にしてようやく松本らしさを味わうことができました。松本へは、母親が長野へ里帰りするのに合わせてなんとかチケットを工面したのですが、いい親孝行ができたかな？と思える夏休みでした。

ところで、このサイトウキネンオーケストラは日本の音楽界において大きな役割を果たした齋藤秀雄先生を記念して結成されたものと聞きました。齋藤先生の教育に対する考え方には、共感できることが多くあり、現在、とある証券会社において人材育成の仕事に従事している私も大きな影響を受けました。特に、若い人たちに對する教育において基礎を徹底的に教えることを重要視していたことや、レッスンでこと細かに教えたことをもとにそのまま演奏することを全く評価せず作曲家の意図や思いを自ら考えて演奏することを大事にしていたことなど、社員教育に置き換えて考えると同じようなことが言えるのです。

今、弊社の社員教育では新入社員から三年目までを育成機関と位置付けて研修を実施しています。特に新入社員に対しては入社後一ヶ月半、その後も配属先において一、二ヶ月おきに研修を実施しています。社会人としての基本的なマナー、商品知識、営業スキルについて研修を実施しますが、若い社員は吸収するのも早く、さらに現場を経

験してしばらくすると、ずいぶん立派になったなあと感じます。それだけにこの期間に行なう教育の重要性を感じています。

また、自ら考えて行動することの大切さについては、齋藤先生のレッスンでの指導を、会社における上司からの指示に置き換えると……、指示を受けた社員が与えられたことをそのまま何も考えずに仕事をするのか、与えられた指示(仕事)が会社にとつてどのような意味があり、その先ほどのように影響を与えるのかを考えて仕事をするのかは大違いで、その成果に大きな差ができる。と言えるのではないのでしょうか。特に中堅社員に求められる考え方だと思えますが、リーダー研修と位置付けて自ら考えることの大切さを気付かせようとしています。

と、今の社員教育に大切なものを考えさせられたのですが、それらの教育の成果と言いましようか、小澤征爾をはじめ世界をリードする音楽家が現れ、音楽界を引っ張っています。社員教育においては(ここまで来ると社員教育といえるかわかりませんが)次世代経営者の育成が課題とされています。最近では大学の多くで、社会人向けの大学院にMBAを取得するビジネススクールが創設されています。他にもコンサルティング系会社によるビジネススクール等多くの教育機関が経営層、マネージャー層への教育の場を提供してくれまます。しかし、多くのスクールは、海外から輸入して

きたようなプログラムを実施し、ケーススタディも海外企業を使用したり、わざわざ学校に通わなくても、本を読めば済むような内容のものもあり疑問に思うところもあります。受講者も業種、役職、経済・経営に関する知識レベルがさまざままでどうしても一般的なことしか学べないようなものも多くあります。そんな中、この寄稿をきっかけに最近ホームページで拝見した、信州大学経営大学院イノベーション・マネジメント専攻は社会科学系と理工系の本格的な連携による経営大学院で、対象とする層、そのねらいがはっきりしていて、非常に特徴的でした。

中央官庁からの交流教官や、実際産業界で活躍されている方からの講義など魅力的に見えます。私は、一九九五年の入学で、奥田先生のゼミに所属しました。奥田先生は(旧)大蔵省からの交流教官で信州大学にいらっしやいました。今思えば、こんなに貴重なことはなかったと後悔しており、いろいろと聞いておけばよかったと思っています(そのころは何を聞けばいいかも分からなかったのですが)。私が入学した当時から、特徴ある大学入試の実施など、常に新しいことに取り組んできた信州大学経済学部は、この経営大学院をはじめこれからも「イノベ

ーション」を起こしてくれるものと期待しています。

実は、大学を卒業以来、あまり大学時代の方々とは交流がありませんでした。ゼミの奥田先生も二〇〇一年に残念ながら他界されゼミ生同士で集まることもなく信州大学を感じることはありませんでした。そんなとき同じ会社の信州大学出身の後輩と集まることがあり、当時の思い出などを久し振りに話しました。さらに、今回このような寄稿の機会を与えていただき、信大の時のことをいろいろと思いつけました。大変感謝しています。ありがとうございました。

編集後記

学生一人当りの高等教育費は、アメリカ二・二万ドルに対し、日本は一・二万ドルと約半分である。うち公的負担は、アメリカ三五%、日本四一%である。日本の高等教育予算は、対GDP比でみて、〇・五%であり、アメリカの一・〇%、EU一九カ国平均一・一%の半分にすぎない(OECD統計)。

こうしたなかで、グローバル化や知識社会に適應すべく大学の国際競争力の強化が叫ばれている。しかるに一方、大学予算の削減が、「選択と集中」のかけ声のもと短期的な視点から進められており、ことに基礎研究や人文・社会科学など、「非即戦力」分野が、そのしわ寄せを受けている。

たとえば、いまや電子ジャーナル(電子化された論文のデータベース)は、大学における必須の研究手段となっているが、人文・社会系のジャーナルは、理工系に比べて使用頻度が低いなどの理由から、その購入経費を削られつつある。使用頻度が低いものも、そこにあるというのが大学図書館ではないか。これでは研究はできない。基礎研究や文系学問の軽視は、一〇〇年の計という観点からいって、重大な結果を招くであろう。

卒業生の皆様、一〇月二日のホーム・カミングを是非！
(事務局)

平成20年度総会/学部創立30周年記念行事案内

経済学部同窓会総会を下記のとおり開催いたします。また総会后に、経済学部創立30周年記念行事が開催されます。同窓生の皆様のご参加をお願い申し上げます。

なお、出欠は、同封の八ガキを9月19日(金)までにご返送ください。

信州大学経済学部同窓会 会長 矢口晋司

■経済学部同窓会総会

日時 平成20年10月12日(日)

場所 信州大学経済学部 新棟6階第一会議室

午前10時30分 開会

- 議題 1 事業報告および会計報告の承認について
- 2 予算および事業計画について
- 3 役員の出選について
- 4 その他

午前11時30分 閉会

■経済学部創立30周年記念行事

日時 平成20年10月12日(土)

13:00~13:40 記念式典……信州大学経済学部

新棟1階 第一講義室

13:40~14:15 記念講演……信州大学経済学部

新棟1階 第一講義室

14:20~15:20 シンポジウム……信州大学経済学部

講義棟2階 第二講義室

16:00~17:30 祝賀会……ホテル プエナビスタ

(松本市本庄1-2-1)

TEL0263-37-0111